

18	豊田	猿投台中学校	コマダ サアヤ
			氏名 駒田 紗彩
分科会番号	2	分科会名	外国語教育

自分の思いを楽しく、工夫して伝え合うことができる児童の育成  
 — 4年生外国語活動「4年新鮮市場をオープンしよう」の学習を通して —

### 1 主題設定の理由

本学級は男子14人、女子6人、計20人の学級であり、児童は明るく元気で、どんなことでも前向きに取り組むことができる。外国語に対する意識アンケートを行ったところ、外国語の授業が「好き」と答えた児童が85%いた。特に、ゲームなどのアクティビティーや英語の歌を歌うことを楽しみにしている児童が多い。しかし授業の様子を見ていると、映像を見たり、音声を聞いたりして分かったことを発表する場面では、答えは分かっているけど、自信がなく、なかなか手が挙げられない児童もいる。また、全体で単語の練習する時にははきはきと言える児童も、個人になると「何て言うの?」とすぐに友達や先生に尋ねる児童も多い。外国語を使って対話をするのが好きかという質問に対しても「好き」「どちらかと言えば好き」と答えた児童が75%いた。しかし、インタビュー活動の様子を見ていると、自分の言いたいことを伝えることに精一杯で、相手の話十分に耳を傾けることができず、会話が一方的で終わっていきたりする児童もいる。この単元を通して、外国語を楽しく、間違いを恐れず話すことや、相手に分かりやすく伝えるために自分なりに工夫してコミュニケーションをとってほしいと考えた。

本単元では、八百屋さんと果物屋さんを開き、パフェやピザをつくる活動を行う。普段から自分たちに身近なお買い物の場面を設定することで楽しく活動に取り組めると考えた。また、相手に分かりやすく伝えるためのコミュニケーションのポイントを考えたり、クラスの友達同士でたくさんよいところを伝え合ったりする中で、自分の話す英語が伝わったときの喜びを実感できると考えた。

### 2 めざす子ども像

楽しく、自分の思いを相手に分かりやすいように工夫しながら伝え合うことができる児童の育成

### 3 仮説と手立て

【仮説1】興味もてるようなゲーム、目的・場面が明確な言語活動を多く設定し、表現十分に慣れ親しむことができれば、自信をもって楽しく対話することができるだろう。

仮説1に対する手立て（交流活動や単元の工夫の充実を図る）

#### 手立て①：ペアやグループの活動の充実

毎時間の活動や帯学習の時間にペアで学習した単語や表現を使ったゲームや簡単なやりとりを繰り返すことで、英語の単語や表現に十分に慣れ親しませ、自分の考えを安心して、楽しく伝え合うことができるようにする。

#### 手立て②：楽しくやりとりが繰り返してできる言語活動の設定

買い物に使う表現に十分に慣れ親しみ、楽しくやり取りができるように、ピザやパフェづくりの場面を設定する。また、自分のため、お家の人のため、5年生のためと買い物を目的とする相手を変えることで、同じ表現を繰り返し何度も練習できるようにする。

【仮説2】友達との対話の中で、相手の様子をよく見て、話をよく聞いて、よかったところを共有することができれば、相手を意識し、工夫して自分の思いを伝え合うことができるだろう。

仮説2に対する手立て（お互いのよさを認め合う機会の充実を図る）

<p><b>手立て③：振り返りの充実</b></p> <p>毎時間、振り返り用紙に MVP とその理由を記入させることで、相手の活動の様子をよく見たり、話をよく聞いたりすることができるようにする。</p>
<p><b>手立て④：お互いのよいところを共有する時間の設定</b></p> <p>やりとりの活動の間に「Good job タイム」を設定し、友達のよかったところを全体で出し合ったりすることで子どもたちにどんなことを工夫すると分かりやすく伝えることができるのか主体的に考えることができるようにする。</p>
<p><b>手立て⑤：学年を越えた交流活動</b></p> <p>5年生から頼まれた商品を買うに行く場面を単元の最後に設定する。普段接する機会の少ない5年生からたくさんよかったところを伝えてもらうことで、子どもたちの自信を高める。</p>

#### （1）抽出児童について

	児童の現状	教師の願い	教師の支援
A 児	英語に対して興味・関心はあるが、間違ふことへの不安が大きい。対話の場面で友達や先生に「これって何て言うの?」と何回も尋ねる姿が見られる。	どんどん友達に話しかけ、自分の言いたいことが伝わった経験をたくさん積むことで、英語で対話することの楽しさを感じることを期待する。	「Good job タイム」で、困ったことを解決したり、認めてもらったりする場面をつくる。
B 児	授業にとっても前向きに参加しており、自分の思いを友達に伝えたい気持ちは人一倍強い。しかし、話すときに焦ってしまい、相手の話を聞かずに一方的に自分のことだけを伝えてしまう。	相手意識をもち、工夫しながら伝えることが大切ということを理解し、楽しく英語で対話する姿を期待する。	「Good job タイム」で、友達のよかったところを確認し、まねてみることを促す。

#### 4 実践と考察

本単元は、Let's try 2 Unit 7 「What do you want?」を教材として、11月23日の勤労感謝の日に普段お世話になっているお家の方にフルーツや野菜がたくさんあったピザやパフェを贈るという目的と場面を設定し、伝え合う必然性のある体験的な言語活動を通して指導を進めた。また、ALT とのやりとりの中で、ただ自分の思いを言うのではなく、相手に分かりやすく伝えることの大切さを感じ、自分なりに工夫して話をしてみたいと思えるようにした。さらに、どうしたらもっと分かりやすく伝えることができるか教えてほしいという気持ちをもてるように、5年生を招待し、やりとりのよかったところをほめてもらったり、アドバイスをもらったりする場面を設定した。

##### （1）ペアやグループの活動の充実（手立て①）

楽しく、自分からすすんで英語を伝えるために単語に十分に慣れ親しむことができる活動を充実させた。本単元の授業では全体で単語の学習をした後に、ポインティングゲームを行い、ペアで単語を確認した【次頁資料1】。ペアで単語の確認をする時には、相手に合わせて単語の数を増やしたり、画面に表示する単語を変えたりしながら、繰り返し発音した。また、抽出児 A は発音の仕方が分からない単語を

ペアの児童と確かめながらゲームを進めていた。単元終了後に、自信をもって言える単語に丸をつけたところ、抽出児 A・B を含む 95%の児童が全ての単語に丸をつけることができた。そのことから、全体での単語の学習に加えて、ペアで単語を確認しながら繰り返し発音することが単語の定着に効果があることが分かる。また自分からすすんで英語を伝えるためには、買い物のために必要な「What do you want?」や「I want～」などの言語材料の学習が必要である。児童が安心して取り組むことができるように、単元を通して同じグループで活動し、不安な単語や表現を相談しやすい環境を整えた。単元終了後のアンケートでは、抽出児 A・B を含む 94%の児童が「自分で相手の欲しい物を尋ねることができる」、「自分の欲しい物を言うことができる」と答えた。また抽出児 A の振り返り用紙から友達から教えてもらったことが、英語で話すことの安心感や、英語で話そうとする意欲につながったということが分かる【資料 2】。



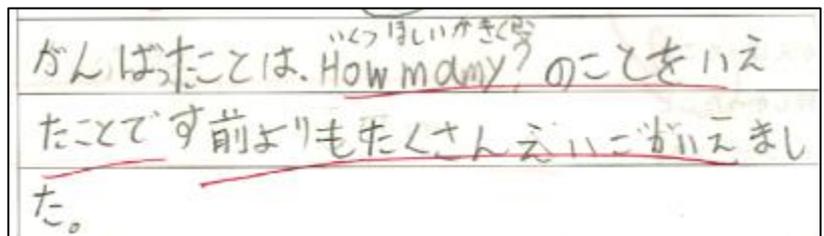
【資料 1】ポインティングゲームとは

Today's MVP	【はな さん】
GOOD!	私が「えいごをいえながらたのしみやしくおしえてくれたのでうれしかったです
ふりかえり	😊 😊 😞
分かったこと	すこしほしい物を早く買うの「えいご」
がんばったこと	が「い」が「え」だけじゃなく「い」も「え」
難しかったこと	
チャレンジしたいこと	

【資料 2】 抽出児 A の 2 時間目の振り返り用紙

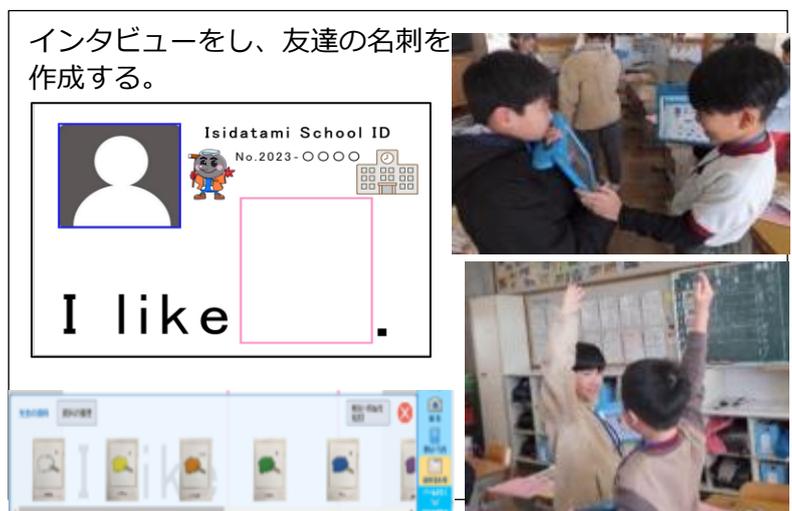
## (2) 楽しくやりとりが繰り返してできる言語活動の設定 (手立て②)

フルーツや野菜を買いに行くという、児童にとって身近な場面を設定した。最初は自分の好きなフルーツがのったパフェをつくるための買い物、次にお家の人にあげるピザやパフェをつくるための買い物、最後に 5 年生が食べたいフルーツや野菜の買い物と、相手を変えながら繰り返し行った。抽出児 A の振り返りでは、「前よりも〇〇ができるようになった。」と、前時と比べた記述が多く見られた【資料 3】。同じ言語材料を使った活動を繰り返すことで、前時と比べて、何ができるようになったかを実感することができ、そのことが自信につながったことが分かる。



【資料 3】 抽出児 A の 3 時間目の振り返り用紙

英語を使って自分の思いを楽しく伝え合うためには、相手に伝わったという経験を積み重ねていくことが重要であるため、朝の帯学習の時間には「ID switch (名刺交換)」【資料 4】を継続的に行った。「ID switch」とは、友達が話す英語



【資料 4】「ID switch (名刺交換)」とは

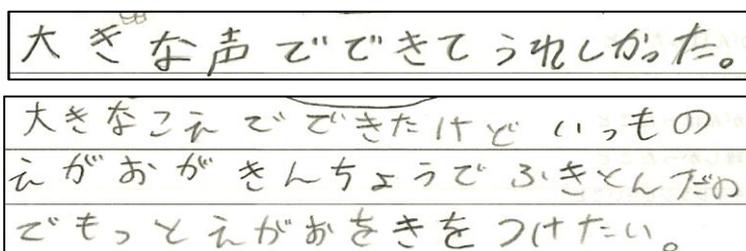
を聞き取り、友達の ID を完成させることができれば、ハイタッチをする活動である。自分の英語が相手に伝わった時や、友達の英語が聞き取れた時の喜びを友達と共有した。抽出児 A と B は当初、自信のない様子で話していたが、多くの児童とハイタッチをし、英語でコミュニケーションがとれた喜びを友達と共有し、自然と相手の顔を見て、楽しそうに英語で話す姿が見られた。相手に伝わったかその場で分かることが児童の英語で話すことに対する自信につながる事が分かる。またその場で相手と意思疎通ができたか確認をとる方法として、ハイタッチは有効であるとする。

### (3) 振り返りの充実 (手立て③)

相手に伝わりやすいように工夫して話せるようになるには、話している様子をよく見たり、よく聞いたりしようとする事で、どんなところを工夫して話すといいのかを見つけられるようになることが大切であると考えた。そこで、毎時間、その時間の MVP とその理由を記入できるように振り返り用紙を作成した。また、言語活動に入る前に、相手に伝えるための工夫を見つけた児童を意図的に指名し、共有した。抽出児 B の振り返りを見ると、2 時間目までは英語が上手に言えていることなどから MVP を決めていることが多かった。しかし 3 時間目からは、相手に伝えるためにどんな工夫をしていたかを見て MVP を決

	MVP を選んだ理由
①	〇〇さんの発音がよかった
②	〇〇さんの発音がよくて、聞きやすかった
③	〇〇さんのはっきり大きな声で話せているのがよかった
④	〇〇さんが指で数字を表していた。
⑤	〇〇さんがはっきりした声で、笑顔で話せていた。

【資料 5】抽出児 B の MVP を選んだ理由



【資料 6】抽出児 B の 4 時間目と 5 時間目の振り返り

めていることが増えた【資料 5】。また自分自身の振り返りも始めは、覚えられない単語やできなかったことなどについて書くことが多かったが、単元の後半は、自分なりに工夫して伝えたことやもっと工夫してみたいことを書いた【資料 6】。このことから、振り返りを充実させたことにより、自分の思いを伝えることだけではなく、相手のこと見たり、聞いたりすることへの意識が高まったことが分かる。また、友達のすてきな姿を見つけることにより、相手に分かりやすく伝えるためには、どんなことを工夫すればよいのか具体的な姿を学ぶことができ、工夫して伝えていこうとしたことが分かる。

### (4) お互いのよいところを共有する時間の設定 (手立て④)

授業の流れを固定し、活動の中で、友達のよかったところを全体で出し合うことを通して、子どもたちがどんなことを工夫すると分かりやすく伝わるのか主体的に考えることができる授業を目指した【資料 7】。

Activity 1 と Activity 2 の間に設定した「Good job タイム」では、Activity 1 のよい例を取り上げて見せてもらったり、分からなかった表現やレベルアップできることなどを共有したりした。

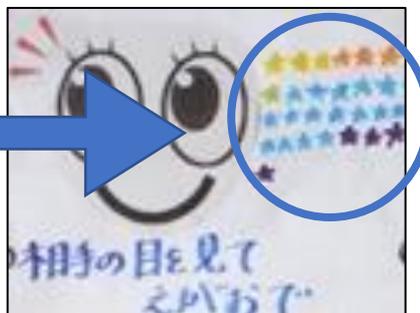
「Good job タイム」でよい例である理由を考えたことで、子どもたちの言葉で相手に分かりやすく伝えるための工夫が多く出てきた。

① Warm up	: 言語への慣れ親しみ (あいさつ・歌など)
② Review	: 前時までに学習した単語・表現の確認
③ Activity 1	: 表現を使った言語活動
④ 「Good job タイム」	: 中間指導
⑤ Activity 2	: 「Good job タイム」で出たことを意識しながら、Activity 1 と同じ活動をもう一度取り組む
⑥ Reflection	: 振り返り

【資料 7】外国語活動の授業の流れ

また、「Good job タイム」で出てきた意見を模造紙にまとめ、教室に常時掲示をした【資料 8】。「Good job タイム」で意見が出る度に星マーク（★）をつけていき、友達がどんなところを工夫して話しているのかを掲示を見ればすぐ分かるようにした。

Activity2 では、「Good job タイム」で出てきたことの中から自分が意識したいことを選び、取り組むことができ、どの授業でも、Activity1 と比べると Activity2 の方が主体的にやりとりする様子が見られた【資料 9】。



【資料 8】  
「Good job タイム」掲示



【資料 9】  
3 時間目の Activity 2 の様子

### （5）学年を越えた交流活動（手立て⑤）

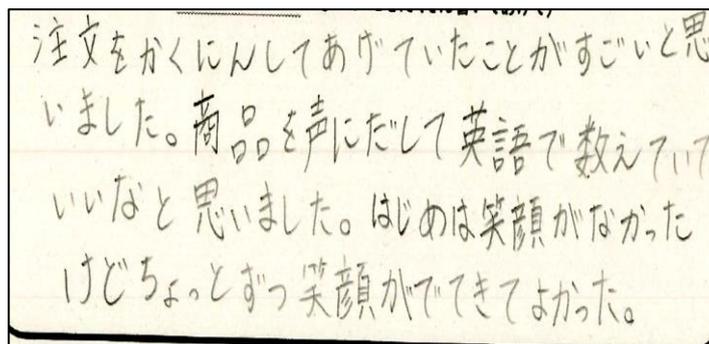
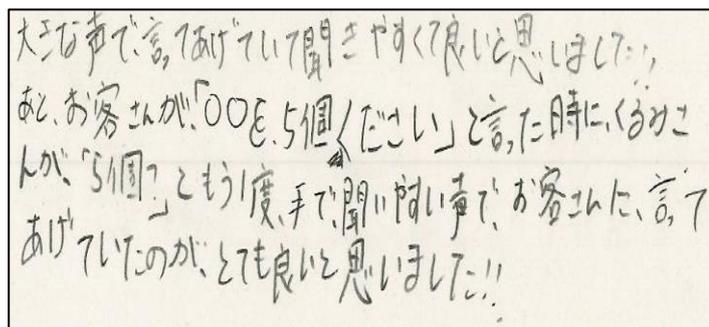
学習を進める中で、どうしたら相手に分かりやすく伝えることができるか教えてもらいたいという気持ちをもった児童が増えた。そこで昨年度、この単元を学習した 5 年生を招待し、アドバイスをもらおうと考えた。

5 年生児童にはあらかじめ、ピザやパフェをつくるためにほしい野菜や果物を選んでもらい注文リストをつくってもらった。また、4 年生のいいところやもっとよくなることをたくさん見つけて、「Good job タイム」や振り返りで共有してもらえるよう依頼し、単元のねらいを共有しておいた。5 年生の振り返りから 4 年生の様子をよく見て、工夫して伝えることを評価してくれていることが分かる

【資料 10】。

5 年生は授業に参加する意図を確実に理解し、「Good job タイム」で、多くの 5 年生がジェスチャーを使って伝えようとする 4 年生の姿を数多く紹介したため、Activity 2 では抽出児 A が数を手で表しながらやりとりしている様子が見られた【次頁資料 11】。

単元終了後のアンケートで「5 年生との活動はどうだったか」と尋ねると抽出児 A・B 含む 89% の児童が「楽しかった」と答えた。その理由として、多くの児童が普段授業で関わることの少ない 5 年



【資料 10】抽出児のペアの 5 年生の振り返り

生といっしょに授業ができたことやよいところをたくさんほめてもらったことを挙げていた。

このように外国語活動で異学年と交流すること、褒めてもらうことが英語で自分のことを伝えることに対して自信を高め、英語を使って楽しく活動できたことが分かる。



## 5 研究成果と今後の課題

【資料 11】 抽出児 A の様子

### (1) 成果

#### ① 仮説 1 について

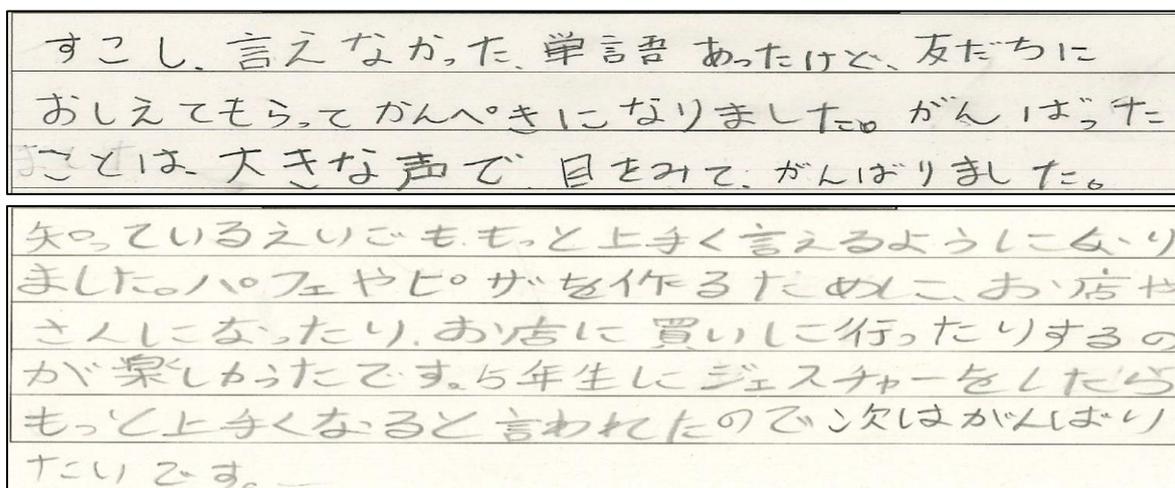
毎時間の活動でペアの活動を繰り返す中で単語や表現に十分に慣れ親しみ、自信をもって話すことができた。また、「自分の言いたいことが伝わった」、「相手の言いたいことが聞き取れた」と実感できる体験を繰り返す中で楽しく、自分の思いを工夫しながら相手に伝えようとする児童が増えた。同じ活動を目的と相手を変えることによって、飽きることなく何度も繰り返し活動することができた。グループを固定したことで、お互いに助け合ったり、アドバイスをしたりしながらよりよいコミュニケーションをめざす児童が増えた。

#### ② 仮説 2 について

コミュニケーションの中で相手の様子をよく見て、聞くことを意識したことで、どんなことを工夫すると相手に伝わりやすいのか、主体的に考えることができた。中間指導でよい例を共有したことで、自分なりに工夫して分かりやすく伝えようとする姿が多く見られた。友達同士、教員、5 年生によかったところをほめてもらったことが自信に繋がり、より相手を意識してコミュニケーションをとろうとする姿が見られた。

### (2) 研究のまとめと今後の課題

児童の単元の振り返りの記述から、ペアやグループを固定し、単語や表現を繰り返し学習したことで、自信をもって楽しく対話する児童が増えたことが分かる。また、活動の中で友達や 5 年生によかったところを褒めてもらったことで、児童の自己肯定感も上がり、さらに友達と進んでコミュニケーションをとりたいという意欲が高まったと考える【資料 12】。



【資料 12】 単元終了後の振り返り

今後はペアやグループで楽しく繰り返しやり取りできる活動をさらに充実させていきたい。また今回の Good job タイムで出たことを継続して意識し、相手と楽しくやりとりできるよう支援していきたい。5 年生が 4 年生の授業に参加する目的を十分に理解し参加したことが 4 年生の自信に繋がった反面、今回 5 年生が活躍できる場面が少なかった。双方の学年にとって、意義のある異学年交流の方法を考えていきたい。